

蒸し暑い夜が明け、窓の外から吹き込んでくる澄んだ冷たい風。

徐々に昇った太陽の熱が伝わってくる中、股座に感じたのは何かに包まれるような温かさと柔らかさ、そして下腹部に感じる熱い息づかいと重さだった。

「あっ……起きた？」

違和感に目を覚まして身体を起こそうとすれば、目にしたのは美奈が乳房を露にして男根を胸の間に挟み込み、亀頭の先端を咥えながらチロチロと敏感な表面を舐めている様子だった。

「何してるの？」

「決まってるだろ？ 恋人の朝勃ちを処理してやってるんだよ。ほら、こういうのって男なら誰でも懂れるシチュエーションだろ？」

言いながらニヤニヤと口元を緩めながら男根を抜きあげる美奈。パイズリから男根を解放するとそのまま指先で包み込み、細い指先が肉竿を上下に擦りあげるように抜き、与えられる刺激に思わず身体が震えてしまう。

「ふふっ♡ ねーちゃんのパイズリと手コキが気持ち良いか？ でも、この程度で満足して貰っちゃ困るなあ♡ ねーちゃんももう、こっちは準備万端なんだ」

言いながら乳房を露にしていた美奈が膝立ちになって起き上がれば、彼女が指し示したのはショーツ一枚になっている下半身。

美奈が穿いていた飾り気の少ない白いショーツは既にグツシヨリと濡れていて、秘所に当たる股布が色味を濃く変えていた。

「チンポももう限界だろ？ 最後はねーちゃんのおまんこでイかせてやるよ♡」

言いながら美奈が男根を跨ぐように馬乗りになると、そのままショーツの布地をずらして秘所を露にする。そして美奈がそのまま腰を落とせば、亀頭の先端に感じたのは熱く濡れそぼった膣穴の感触。

「あっ……♡ やばっ♡ んっ、んああっ♡ おっ♡ おほっ♡ んおおっ♡ おほっ♡ んほおおおおっ♡」

美奈の肉穴が男根を包み込み、そのまま美奈は両手を前に腰を浮かして上下に腰を振り始める。お腹に感じる美奈の手のひらの感触。

タンッ、タンッと小気味よく響く美奈のお尻が股座に打ちつけられる感触。柔らかくピツタリと締め付ける膣穴の感触にこみ上げてくる射精感。

「アンタのチンポが膨らんでるのわかるよ♡ このままねーちゃんのオマンコに中出しして♡ 従姉の子宮に種付けして……、アンタの赤ちゃん……、この夏に絶対に孕ませて♡」

美奈の種付け懇願に本能を刺激されて、気が付けば美奈の絶頂と共に膣内に精液を解き放っていた。

「あっ♡ ああっっ♡ イくっ♡ 中出しで……♡ あああっ、イぐっ♡ イぐっ♡ あっ♡ ああああああっ♡」

汗に濡れた褐色の肌、爆乳が絶頂と共にぶるんと宙に浮かぶように揺れて、その動きに合わせて金色の髪がフワリと浮き上がる。

やがて身体を支えることも出来ずに美奈が折り重なるように倒れれば、美奈は未だ脈動する男根の感触を膣内に感じながら、幸せそうに口元を弛める。

「忘れられない夏になりそうだろ？ もう一回……やっとか♡」

そして耳許に囁かれた彼女の誘いにこみ上げてくる衝動。再び美奈の嬌声が響き始めるのに、一分と掛からなかったのだった。